

島根大学研究見本市

研究テーマ名

英語史における英語文法に関する実証的・理論的研究
An Empirical and Theoretical Study of Grammatical Changes in the History of English

研究者紹介

縄田 裕幸(教育学部・教授)
Hiroyuki Nawata (Faculty of Education, Associate Professor)

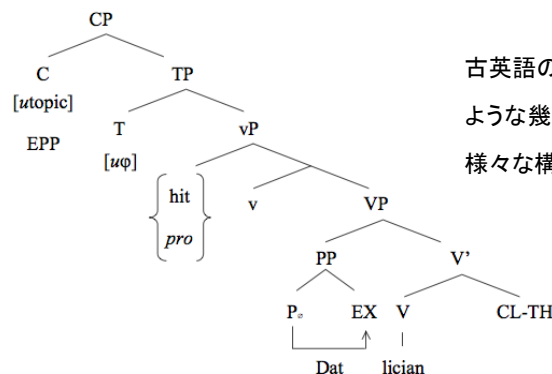
概要

私の研究の主たる関心は、英語の語形変化と文法変化の関係を明らかにすることです。現代英語の動詞の屈折は3人称単数現在形の-sと過去形の-edにほぼ限られていますが、古い時代の英語の動詞は今とは比べものにならないくらい豊かな語形変化を示していました。興味深いのは、これらの屈折接辞が衰退すると連動して、英語の語順が大きく変動し、現代英語で見られる SVO 語順が確立したことです。このような歴史的变化のメカニズムを説明することが、現代英語のより深い理解、さらには言語の普遍的な特性の解明にもつながるはずです。

My research interest primarily concerns the interaction between morphological and syntactic changes in the history of English. While verbal inflection in Present-day English is almost restricted to -s expressing the 3rd person singular agreement and the past tense -ed, verbs in Old English exhibited far richer inflection. What is interesting is that the decline of inflectional morphology triggered drastic word order change, which has resulted in the establishment of the SVO order in Present-day English. I believe that such historical studies can contribute to the proper understanding of the English language in particular and of the universal properties of the human language in general.

特色 研究成果 今後の展望

最近関心を寄せているテーマのひとつに、英語における心理動詞構文の変化があります。現代英語では I like apples. といいますが、古い時代の英語では Apples like me. あるいは Me like apples. という形式で表されました。1300年代末に活躍した Chaucer の作品には、これら3種類の構文が混在した形で観察されます。私は Apples like me/Me like apples から I like apples への変化が、名詞の格変化を示す語尾の衰退と動詞が文の2番目に生じる語順の消失、という2つの要因によりもたらされたのではないかと考え、両者の相関関係について調査と分析を進めているところです。このような個別現象の分析を積み重ねることによって英語の文法変化の全体像を描き出すことを目指しています。



古英語の like 型構文の構造:このような幾何学的樹形図を用いて、様々な構文の構造を分析します。

キーワード

生成文法, 統語論, 英語史

リンク

<http://www.edu.shimane-u.ac.jp/staff/staff64.html>